

伊藤左千夫の万葉集評釈

貞 光 威

伊藤左千夫は明治三十七年二月発行の「馬酔木」八号誌上に「万葉通解著言」を発表した。「著言」とは、どの漢和辞典にも見当らぬ珍しいことばであるが、同じ文中で左千夫が「端著」と書いているところを見ると、これは「緒言」すなわち前書きの意と考えられる。「緒言」をシヨゲンと読まずにチヨゲンと読んで、「緒」と同じ音の「著」の字を用いたらしい。この文章は左千夫が「馬酔木」の次号（明38・2）から万葉集の歌の評釈を始めるにあたって、その心構えを開陳したものである。

こうして「馬酔木」九号からいよいよ始まった左千夫の万葉集の評釈は、最初は「万葉集短歌通解」と題されていたが、それが五回つづいたあと、明治三十八年一月発行の「馬酔木」十五号から「万葉集短歌私考」、さらに三十九年二月発表の三巻二号からは「万葉集新釈」と標題を改めて発表されていった。この左千夫の評釈は、「馬酔木」が四十一年一月に廃刊になったのちも「アララギ」に引き継がれ、四十四年九月の同誌四巻八号まで通算二十六回にわ

たって掲載された。評釈した歌の数は、一回に長歌一首だけのこともあれば、短歌五首、六首ということもあってまちまちであるが、万葉集巻一の歌の中から合計七十二首を評釈している。万葉集の巻一の中には、長歌、短歌を合わせて八十四首が収められているから、左千夫は巻一の歌を、あと十二首残すだけで、その大半を評釈したことになる。

彼の評釈はきわめて入念なもので、一首の歌を評するのに四百字詰原稿用紙にして十枚（万葉集開巻第一の雄略天皇御製の場合）とか十五枚（二十九番「近江の荒れたる都に過るよき時に柿本朝臣人麻呂の作る歌」の場合）という長文のものもあって、七十二首の歌を評釈するのに約三百二十枚分の文字を費している。

このような左千夫の万葉集の評釈は、歌人としての彼の短歌観を明らかにしている点で重要であるばかりでなく、明治期における万葉集の研究史の上からも注目すべきものがある。ところが、左千夫の万葉集の評釈そのものについての検討は、斎藤茂吉の「伊藤左千夫と万葉集」（『伊藤左

「左千夫」中央公論社 昭17・8 所収)をのぞくと管見に入らない状況なので、ここに、左千夫が精力を注いで行なった万葉集評釈の仕事を概観し、その仕事の意義について考へることにしたい。

まず、左千夫が「馬酔木」および「アララギ」に評釈を發表していった足どりを表にして示すと次のとおりである。(なお、いちばん下の欄の算用数字は、評釈をした歌の国歌大観番号で、「⑰―18―19」のように、○印をつけたのは長歌の番号、そのあとにある、―につづく数字は長歌に付属する短歌、すなわち反歌の番号である。)

標題	掲	載	誌	評釈した歌
万葉通解著言	「馬酔木」	八号(明37・2・2)		
万葉集短歌通解一	「馬酔木」	九号(明37・2・27)		7 8 9 10 11 12
〃	「馬酔木」	二号(明37・5・5)		15 20 21
〃	「馬酔木」	三号(明37・7・15)		22 23 24
〃	「馬酔木」	一三号(明37・8・25)		27 28 32 33 34
〃	「馬酔木」	一四号(明37・11・6)		35 40 41 42
〃	「馬酔木」	一五号(明38・1・3)		43 44 51 66
万葉集短歌私考六	「馬酔木」	二卷三号(明38・5・29)		67 68 69
〃	「馬酔木」	二卷四号(明38・7・18)		70 54 62
〃	「馬酔木」	三卷二号(明39・2・15)		63 55 57
万葉集新釈	「馬酔木」	三卷三号(明39・3・31)		58 59 60 61 64 65

〃	〃	十一	「馬酔木」	四卷二号(明40・5・25)	71 72
〃	〃	十二	「アララギ」	一卷三号(明42・4・30)	①
〃	〃	十三	「アララギ」	二卷一号(明42・9・1)	② ③ 4
〃	〃	十四	「アララギ」	二卷二号(明42・10・1)	⑤ 6
〃	〃	十五	「アララギ」	二卷三号(明42・11・1)	⑬ 14
〃	〃	十六	「アララギ」	二卷四号(明42・12・1)	⑯ 16
〃	〃	十七	「アララギ」	三卷一号(明43・1・29)	⑰ 18 19
〃	〃	十八	「アララギ」	三卷二号(明43・3・1)	⑳
〃	〃	十九	「アララギ」	三卷三号(明43・4・1)	㉑ 30 31
万葉集新釈 (柿本人麿論)	〃	二十	「アララギ」	三卷五号(明43・6・1)	36 37
万葉集新釈	〃	二十一	「アララギ」	三卷六号(明43・8・1)	㉓ 39
〃	〃	二十二	「アララギ」	三卷九号(明43・12・1)	㉕ 46 47 48
〃	〃	二十三	「アララギ」	四卷二号(明44・2・1)	㉗ 49
〃	〃	二十四	「アララギ」	四卷四号(明44・4・1)	㉙ 53
〃	〃	二十五	「アララギ」	四卷七号(明44・7・1)	73 74
〃	〃	二十六	「アララギ」	四卷八号(明44・9・1)	75 76 77

以上のように、左千夫は「万葉集通解著言」に引きつづき、二十六回にわたって、万葉集巻一の歌の解釈と批評を行なっている。

まず、標題について見てみると、「著言」で「万葉通解著言」と、「万葉通解」の名を用いているが、次号から始まった評釈には「万葉集短歌通解」の名が付けられ、これが「馬酔木」十四号まで五回つづく。ところが次の十五号

になつて「万葉集短歌私考」と標題を改めている。このことについて左千夫は

予は改題の理由を説明せねばならぬ、予は始は万葉集を成るべく一般人にまで解せしめんと思つたのである、稍歩を進めて見るに及び、迎てもさういふ事の出来なことを覺つた、且つ予が作家の見地よりの講評は、到底通解的のやり方とは云はれない、そこで予は通解の名を私考と改題し縦横に予の考を述ぶる積である、とことわっている。左千夫は、万葉集の標準的な解釈を示すことよりも、歌人としての立場から歌についての考えを自由に述べたいという思いを徐々に強め、そのことを標題においても明らかにしようとしたと思われる。

ところが、この標題は三回用いられただけで、「馬酔木」三卷二号になつて「萬葉集新釋」とかわる。こんどの改題については、題名の下に小字で「私考改題」とあるだけで、その理由の説明は行なわれていない。なお「馬酔木」三卷二号の標題は「萬葉集新釋」となっているが、この号の目次や、次号からの標題が「萬葉集新釋」となっているのを見ると、「譯」は「釋」の誤植と認められる。「萬葉集新釋」の名は「馬酔木」で三回、「アララギ」になつてからも、四卷八号で左千夫の万葉集の評釈の仕事が中絶するまで、十五回にわたり、ずっと用いられてゆく。(なお標題についての記述においては、正確を期するために当時の字体に従つたが、先の一覽表や、これよりあとの文中におい

ては便宜上、新しい字体を用いることとする。)

今も少し触れたように、左千夫の「万葉集新釈」は明治四十四年九月発行の「アララギ」四卷八号を最後に、何の予告やあいさつもなしに唐突に中絶している。

左千夫は明治三十七月二月に「万葉通解著言」で

「馬酔木」の経営漸く端著を得たるに乗じて、今は其事に従はんと決心し、先づ順次毎月の雑誌に掲げつ、一面に全部の脱稿を急がんと欲す、されば全部脱稿の上は即馬酔木の掲載を廃して直に発刊すべし

と万葉集全部の歌の評釈を完成しようという、強い決意をもって出発したものであった。また、「馬酔木」を終刊するにあつても、「終刊之消息」(「馬酔木」明41・1)において、

放縱落々毫も拘束を知らざりし「馬酔木」編輯者の手を離れ信仰的熱烈なる三井甲之君に依て新興の「アカネ」を経営せらるゝは、斯道の為めに予の衷心より慶賀措く能はざる所なり、今後諸同人の活躍上予は幸に客位の地に居るを許され、年来の事業たる万葉集新釈の稿を急がんとするは、予の熱烈なる希望にして又一生の責任なり、

と述べている。これを読むと、当時、左千夫が「万葉集新釈」の執筆に対していだいた熱意を知ることができるが、その点は、明治四十年十二月四日付の胡桃沢勘内宛書簡で

左千夫が

小生ハ実ハ直接の事ハ避け万葉新釈を急ぎ度希望山々に候

と述べ、六日付の依田貞種宛書簡で

今後助成者の位置に立ち万葉集新釈の稿を急ぐ覚悟に候

と述べているのと一致する。

しかし、そのような意気込みで行なった「万葉集新釈」の仕事であったにもかかわらず、左千夫は「アララギ」四巻八号（明44・9）を最後に執筆を中止し、彼はそれからのち二度と評釈の筆をとることがなかった。休載についての事情説明が「アララギ」誌上に全く見られないのは不思議であるが、森山汀川の「朧げな記憶」と題する回想（「アララギ」十二巻七号「伊藤左千夫号」大正8・7）によれば、汀川が「万葉集新釈」の中絶を惜しむ由を左千夫に言ったところ、「いや止めたのでは無い。何れまともて別に出すつもりである。」と答えたという。折を見て、評釈をつづけたいという気持を左千夫は持っていたものと考えられる。

それにもかかわらず、「万葉集新釈」は再び書き継がれることなくして終わった。

その理由^(注)としては、小説の執筆等でそれまでよりさらに多忙となったこと、健康に衰えが生じたらしいことが、その主なものと考えられるが、もう一つの理由として、この

年のはじめごろから、門下の茂吉や赤彦ら若い世代の人々と左千夫との間に短歌観の相違が目立つようになり、西欧の叙情詩に関心を深めた若い門下の人々が、この当時、左千夫の考えるほど万葉集への関心を示さなくなり、そのために左千夫が執筆の意欲を失なうということが幾分なりともあったのではないかと推察される。

次に左千夫が万葉集巻一の歌をどのような順序に取り上げて評釈していったか、その順序について見てゆくことにしたい。彼は「万葉集短歌通解」の第一回を「馬酔木」九号（明37・2）で始めるにあたって、その冒頭のところで、

本集は開巻長歌であるので、順序よりいふと長歌から始むべきであれど、複雑な長歌よりは比較的簡単な短歌を先にやる方、読者に便宜よからふかと思へるまゝ、途中から始める様な奇観を現すけれども、此短歌通解を先にしたのである。長歌に附属してある即反歌の短歌は、本歌の長歌を解する時、一所にやる積りで、其分は此解に除く、

とことわって、長歌とはかわりのない短歌だけを、『国歌大観』の番号でいうと七・八・九・一五・二〇・二一……七二・七三の順に評釈してゆく。こうして、短歌の評釈が十一回にわたって行なわれ、三十九首の評釈がすんだところで、「馬酔木」は終刊を迎える。こうして、左千夫の「万葉集新釈」は一時的に中絶するが、「馬酔木」終刊号（四巻三号 明41・1）が出てから八ヶ月後の明治四十一

年の九月に千葉県山武郡埴岡村の蕨真のところから「アララギ」が刊行されると、左千夫は翌年四月発行の一卷三号から再び「万葉集新釈」を発表するようになる。

「アララギ」に「万葉集新釈」と掲載するようになったのを機に、こんどは長歌の評釈に移って、一・二・三……五〇・五二とやってゆき、これを十三回つづけ、七十二番歌までをほぼ終えたあとで、左千夫は「万葉集新釈 第二十五回」(「アララギ」四巻七号 明44・7)の冒頭で、

茲までの短歌は『馬酔木』で解釈してある、『馬酔木』の短歌釈と『アララギ』の長歌釈と茲で出合うたのである、是よりは短歌も長歌も順次のまゝにやってみようつもりである。

と述べ、この第二十五回で七三・七四の歌、第二十六回で七五・七六・七七の歌を評釈したところで、前にも触れたように左千夫の「万葉集新釈」の「アララギ」への掲載は中絶してしまふのである。

左千夫が評釈をした歌は、巻一の七十七番の歌まででは、二十六番歌と五十六番歌が落ちているが、この二首はそれぞれ「或る本の歌」と題されており、その前の二十五番、五十五番の歌の類歌として、参考に掲げられたものと見られるので、そのために左千夫は二首の歌を評釈の対象からはずしたと考えられる。

このようにして、左千夫は万葉集巻一に収められた七十番歌までのうちの七十五首について評釈をすませたが、

七十八番歌以降の長歌一首と短歌六首を評釈し残したまま中途で終わっている。

次に、左千夫が万葉集の歌を評釈するにあたって、その本文は何から取ったかという点、それは鹿持雅澄の「万葉集古義」を底本としている。その点について、左千夫は「万葉集短歌通解」の第一回の冒頭で、

歌の読方に就きては、学者各異なつた訓をしてゐるのが多いけれど、それを一々彼は引合に出すは甚だ煩しひ、且つ右様の事は本解の目的でないに依て、講者に異存のない限り万葉集古義に依る。

とことわっている。

周知のことではあるが、「万葉集古義」は四国土佐の人、鹿持雅澄によって書かれた注釈書で、歌の注釈を中心に、枕詞、人物、地名など各方面の研究をも含む、百四十一冊からなるところの、江戸時代に書かれたものうち最も本格的な万葉集の研究書である。

左千夫が評釈の仕事をはじめた明治三十七年当時、手に入ることできた万葉集のテキストとしては、流布本である「寛永本」(寛永二十年刊)、それに佐佐木弘綱、信綱父子によって博文館から出されていた「日本歌学全書本」(明治二十四年刊)などがあつたが、注釈の参考にする必要から左千夫は「万葉集古義」を用いたのである。

次に注釈書で当時手に入るものにどんなものがあつたかという点、右の「古義」のほかには僧契沖の「万葉代匠記」、

賀茂真淵の「万葉考」、橘千蔭の「万葉集略解」などがあつた。このうちの「万葉代匠記」は江戸期における万葉集注釈に学問的態度を導いた本格的な研究書であるが、元禄という早い時期に書かれていたため、何といつても訓などに問題の箇所があるのは争えない。「万葉考」の場合は豊かな感性と鋭い直観力に特色があるが、本文を恣意的に改めるなど独断が目立つ。それに、この注釈は万葉集全巻に及んでいないので、全歌の評釈を企図した左千夫の場合、底本とするには不向きである。その点で「万葉集略解」は全歌にわたる注釈である上に、先学の契沖、真淵、宣長、雅澄らの意見を参考にして穩健な態度をとっているが、「略解」の名のとおり、簡略なものなので入門書としては適しても、本格的な注釈を行なうための参考とはなりにくい。その点において、江戸時代の万葉研究の集大成ともいふべき「万葉集古義」に依つたことは、最も妥当な選択であつたといえる。なお、左千夫は評釈にあたって真淵の「万葉考」も部分的に参考に行っていることも付言しておかねばならない。

さて、左千夫が「古義」を熟読して、わがものにしていくことを示す逸話として、次のような話が伝えられている。彼が子規の門に入った年である明治三十三年の四月のこと、子規庵での歌会の席上、和田不可得の歌に「病みこやすあが枕辺のつくり鳥」云々とあつたのを、左千夫は初句を「病みこやる」と改めた上で取つた。左千夫がこの歌を

「こやる」として朗読したところ、出席者たちが耳慣れぬことばなので一斉に笑つた。すると左千夫は「古義」を引いて、「こやす」は尊敬した言い方であつて、自身については「こやる」でなければならぬ旨を弁じたというのである。このことは、子規の書いた『「こやす」といふ動詞』（「日本」明33・4・12）に載っており、左千夫は、この時に子規から「歌会にこやるといひて笑はれて書きしこやるの解は正しも」の一首を贈られている。左千夫は子規のもとに入門する前にすでに「古義」を購入し、これを熟読、自分のものにしていたらしいことが、この逸話からわかる。

この「万葉集古義」を左千夫が手に入れた時期について、左千夫に師事し、近く接した古泉千樫は「伊藤左千夫に就て」（「短歌雑誌」大7・11）という文章の中で、「廿九年に万葉集古義が予約で出版になつた時も、先生はそれを求めて居た。」と記している。今日、出ているところの左千夫についての研究書にも、これを受けて、「古義」の予約募集が明治二十九年に行なわれ、翌三十年に左千夫が購読したとするものが見られるが、なにぶん千樫が左千夫に入門する前のことで、思い違いがあるらしく、この記述には疑問がある。

「万葉集古義」は土佐の地で鹿持雅澄によって書かれた本格的な注釈書で、その初稿本は文政六年（一八二三）ごろ完成し、その後、改訂が加えられて、天保二年（一八三一）に再稿ができ上がっている。しかし、これは注釈の本

文が九十五冊のほか、総論四冊、品解五冊、枕詞解五冊等々、計百四十一冊という、あまりに大部なものであったため、長く公刊されずにいて、明治十九年になって、和歌に心を寄せられた明治天皇のおぼしめしにより、宮内省蔵版として百四十一冊が明治十九年九月から二十六年十二月までかかって刊行されている。「古義」は、その後、明治三十一年七月から十二月にかけて、三十一冊本として今日の吉川弘文館の前身である吉川半七商店から出版された。左千夫が用いたのは、この吉川版の「古義」で、我々は今それを左千夫の故郷の千葉県成東町の歴史民俗資料館に展示された彼の遺品類の中に見ることができ、それには「面白し」「歌にならぬ」などという、朱や墨、あるいは鉛筆の書き込みとともに、巻十の下の裏表紙には「三十三年七月二十日読了」という日付が見られる。この「古義」の奥付を見ると、発行はいずれも明治三十一年である。予約募集がいつ行なわれたかは明らかではないが、左千夫が購入したのは明治三十一年か、それ以後のことで、二十九年とか三十年とかいうことはないと考えられるのである。

次に左千夫の万葉集評釈がどのような特色をもつものであるかについて検討してみたい。大体において、左千夫は歌の訓は二の次にし、もっぱら作品の文芸としての価値の解明にあたらうとしたということが出来る。左千夫は例の「万葉通解著言」で、その点について、

先師正岡氏国歌革新を唱へしより以来、吾人同志の上、万葉研究に心を注ぐ最も深く、其の根底を探り其の趣味を咀嚼し、大に系統的製作に勉む、爾來窃に以謂く、万葉集の趣味的解釈を為し併せて詩人以外の士人をして容易に万葉集を窺ふを得しむるもの、実に吾を置いて外にあるべからずと、

と述べている。左千夫は万葉集の評釈をするにあたって、まず何よりも万葉集を「趣味的」に説明しようとし、それが歌人としての左千夫の使命であると考えたのである。左千夫がここでいう「趣味」というのは、文芸あるいは詩としての味わい、価値といった意味と考えられるが、左千夫は本文をいかに訓読するかといった訓詁注釈のことはしばらくおき、まず第一に歌人としての立場から、詩的価値判断に基づいて万葉集を説明し、その味わいを世の人に紹介しようと考えたのである。

いまここで、そうした左千夫の意図が、どれほどまで実現されているから検討するため、一、二の例に当たってみることにしよう。まず、二十八番の持統天皇御製、

ぐ山

の歌の場合を例にとると、左千夫は「詞の意義は別に解釈するまでもない」「一首の意も読む通りで六つかしいことはない、春もいつしか過ぎて夏がきたらしひ、天の香具山の里に白い衣などがほしてあるよといふのである」と、き

わめて簡略にすませて、そのあとで紙幅のほとんどを歌の鑑賞に費している。その後半を引用すると、

云ふまでもなく、此山は此下の御井の歌などに青香山と歌ふてある位であれば、初夏の青葉の美しきも聯想せられる、青葉の間々に家里も見え衣をほしてある家も見えると云ふ光景、こなたは宮域の一端女帝の立ち給ふ所二三の臣の少女もつき従ふさま、何等優美の好画幅であらう、瞑目して境を想像すると真に神仙境に遊ぶの思ひがするのである、作者はこれ程の景色を顯はすつもりではなかつたらうけれど、作者自らも、自個の作れる歌境中の人となれるは奇と云ふべきだ、勿論第三者の位置から見るとあるが、此歌の如く作者其人をまで読者の想中に描きうるものは稀であらう、

と述べている。

この左千夫の鑑賞には、実際に大和の地に足を運んだことがなかったことも手伝って、香具山をよほど高い山のように考えているらしいことなど、難点もないではないが、持統八年に成った藤原宮の一隅から二、三の女官を従えて、新緑したたるような香具山を眺められる持統天皇の姿を描くところ、左千夫の詩的想像は新鮮で、歌人としての本領を發揮したものになっている。

以上、左千夫の短歌評釈の一例として、持統天皇の「春すぎて……」の歌の場合について見たが、次に長歌の評釈

の一例として、十七、十八番の「額田王、近江国に下る時に作る歌」の場合について眺めてみたい。

この歌の場合も、左千夫は簡単な語句の説明と通釈を行なったあとで、丁寧な鑑賞をしていて、その鑑賞の中では苟も万葉集を読むもの、苟も我国上代の詩を知らんとするもの、否真の詩といふもの、味ひを解せんとするもの、假初にも見過す事の出来ない歌である、(中略)此万葉集中五千の歌中にも此の如き詞はない、(中略)哀情の溢るゝ処、言語が自然に湧来つて、無雑作に出来た歌らしいが、誠に永久不滅の性命ある詩といはゞ、此歌の如きがそれであらふ。面白いと云ふよりは、直に感情の生動に触るゝ様な歌である、と、絶賛ともいえるほめかたをしている。

この長歌は、万葉歌人のうちでも屈指の歌人とされる額田王の作で、その中でも秀歌として定評の高いものであるから、左千夫が賞賛するのも当然といえるであろうが、いろいろな万葉集評釈の書と比べても、その度合が最も強い。それに、左千夫は、この歌の鑑賞にあたって次のような想像を加えている。すなわち、「愈大津の都へ召寄せらるる事になつて、奈良を出づるに臨み、恋人の宮地なる三輪山を望見すれば、雲は山を掩ふて山も見えない、感情の熾烈なる詩聖女王が、茲で其堪へ難き懊悩を漏らさずに居られる訳がない」「真の恋人たる皇太弟に別るゝを悲しみ、遙かに三輪山を見て悲泣の声を呑んだ。現はにさうとも云

ひかねての此長歌は、一言一句悉く其音底に燃ゆるが如き熱情を蔵めて居るのである。」と左千夫は述べている。このところを説明すると次のようになる。額田王は、かねて大海人皇子（天武）と結ばれ、二人の間には十市皇女さえ生れていたけれども、即位こそしていないが実質的に天皇として権力をにぎって行使していた中大兄皇子（天智）に召されて、近江大津の宮に赴かねばならぬこととなった。中大兄の命令というのでいよいよ大和を去って近江に赴くにあたって、今も愛している大海人皇子との別れを惜しんで、その居所である三輪山の地に向かって額田王が嘆いて歌ったのがこれだと左千夫は考えるのである。

このような考え方は、学問的に見るならば、根拠のない恣意的な想像によって組み立てられていると考えられる。まず、大海人皇子の住まいが、近江大津宮への遷都の前ころに、飛鳥でなく三輪山周辺にあったということは疑問がある。そのことについて左千夫は、額田王の作の九番歌を「古義」の試訓に従って

みもろの山見つつゆけ吾背子がいたたしけむ嚴櫃がもと

と読んで、この歌の「みもろ」すなわち神の降臨する山とは大和の国の一の宮である大神神社おのみわじんじやのある三輪山だ、九番歌は、額田王が三輪山の麓に住む大海人皇子のことを詠んだ歌だと主張し、当面の「額田王、近江国に下る時に作る歌」で額田王が三輪山に対する強い執着の情を示すのも、

この山の近くに恋人である大海人皇子が住んでいたからであると説く。そして、この時、額田王が近江へと赴くのに対して、大海人皇子は大和にとどまったものと想像するのである。

左千夫が古義の試訓に従って「みもろの山見つつゆけ」と読んだ、額田王の作の九番歌は、古来、万葉集中一番の難訓の歌として有名で、今日までに三十数種の訓が試みられているが、まだ定訓というべきものを得ていない歌である。今日、古義の試訓を妥当として承認する者は皆無といってよいが、そのような訓を拠り所にした、大海人皇子の住まいが三輪山の周辺にあって、遷都の際に大津へ赴くことなく、大和に残ったと考えるのは根拠のない想像といわねばならない。

この十七、十八番歌には

右の二首の歌は、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、「都を近江国に遷す時に、三輪山を御覧みそこなはす御歌なり。」といふ。

という左注がついていて、この歌集が編集された当時に、この歌の作者が中大兄皇子（天智天皇）であったという伝承のあったことを示している。このことは、この歌が名目上は中大兄の名で公けにされたが、実際の作者は額田王であったのだと、今日では考えるのが一般的になっている。すなわち、この十七、十八番歌は、近江遷都に際して、それまで都の置かれていた大和の国の守護神の鎮座する三輪

山に対して行なった鎮魂の儀礼歌で、中大兄皇子が自身にかわって額田王に歌わせたものと考えられるのである。

そうした儀礼歌にもかかわらず、この歌には大和の国の象徴、三輪山に対する個人的な哀惜の情が溢れている。そうしたこの歌の強い抒情性を見のがさず捕らえて、これを権力によって、愛する人、大海人皇子のもとから引き離されてゆく額田王の嘆きがこもっていると考えた左千夫の鑑賞は、詩的理解としてはきわめて特色ある個性的なものであるといえよう。

そうした左千夫の詩人としての立場からの個性的な万葉集の鑑賞が、最も特色を見せたのが二十九番の長歌、「近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌」を評した場合であろう。左千夫は、この二十九番のいわゆる「近江荒都歌」を評するにあたって、この回の「万葉集新釈」を特に「柿本人麿論」と題して、「予は今此稿に臨んで、愈多年胸中に蓄積せる問題を解決せねばならぬを思うて、覚えず戦慄した」、「歌人が人麿を難ずるのは、宗教家が宗祖を難ずるの感がある」、「予は稿に対して十数日一行を綴ること能はず、毎日万葉集を手にして、復読幾十回漸く意決し心定まるを得たのである」と強い緊張を示している。そして、彼は人麻呂の歌に対する不満として

(一) 文彩余りあつて質是れに伴はざるもの多き事

(二) 言語の働きが往々内容に一致せざる事

(三) 内容の自然的発現を重んぜずして形式に偏した格調

を悦べるの風ある事

(四) 技巧的作為に往々匠気を認め得る事

の四つを挙げている。そして、問題の「近江荒都歌」を評して、

前半は只如何なる思召で歴代の宮を遷されたかを怪む、後半では只天下を知ろしめた跡が春草茂つて荒たといふだけでは、感慨の動因が余りに平凡過ぎる。人麿の識力も疑はれるのである。(中略) 人麿は言語の綾を悦ぶの弊に陥り、浅薄な形式趣味に憧憬した跡があると見ては居つたが、是程に言語を乱用して居るとは思はなかつた。つまり言語を綾なす技巧が其弊を導いたのである。

と、この歌に見られる修辭的技巧を重視する傾向に対して徹底した批判を加えている。

人麻呂に対する批判としては、昭和八年に評論家の長谷川如是閑が、「万葉集における自然主義」(「改造」昭8・1)、「御用詩人柿本人麿」(「短歌研究」昭8・3)を書いて大きな反響を呼んだ。この評論は「生活感覚から遊離」して「無内容の修辭」を駆使する「浅薄」な「御用詩人」と人麻呂をきめつけたもので、人麻呂を無媒介に偶像視する日本的なものへの無反省な傾斜がファシズムへの道につながることを警告した、昭和初年の社会動向に対する批判であった。如是閑の場合のような思想的な批判は別として、歌人として、万葉集を尊重する立場に立ちながら、徹

底した鋭い批判を加えた者は、万葉研究史を眺めても、左千夫のほかにあまり例を見ることができない。

彼の「柿本人麿論」における人麻呂観がどんなに独自性の強いものであるかを探るために、左千夫に直接教えを受けたアラギ派歌人の斎藤茂吉と土屋文明の場合について見てみたい。

まず、斎藤茂吉は大著『柿本人麿』全五冊（岩波書店昭9（15））を著わして、人麻呂の歌が「常に重々しく、切実でそのひびきは寧ろ悲劇的」であって、その声調は「ディオニソス的」であると、主として音楽的声調の方面から彼の作品を賛美し、「近江荒都歌」についても、「人麿長歌評釈」において、

私はまだ先師程の域に達せざるのみならず、長歌を作り得ない力量程度にあるものである。また鑑賞するに際しても、ある程度までは、人麿に同化し、時代の背景と作歌衝動の奈如とに顧慮しつつ、物言つてゐるのであるから、私の鑑賞は寧ろ讚美に傾いて、先師の如く批難には傾いてゐないのである。

と、左千夫に対して先師としての尊敬をはらいつつも、「近江荒都歌」の評価においては、左千夫とは反対に高い評価を与えている。

土屋文明の場合も、『万葉集私注』第一巻（筑摩書房昭24・5）を見ると、この歌について、

人麿の呼吸の太く長い底力のこもった大波の如き声調

は、古来しばしば種々の讚歎の言辞をあてられたが、なほ未だ言ひ足りない如きところがある。全く言説を絶してゐる。ただ度まねく誦し味ふより外ないのであるまいか。

と、茂吉の場合以上の、最大級の賞賛を与えている。これを見ても、左千夫が行なった人麻呂批判が、歌聖として人麻呂を崇拝するむきの多い歌人たちの中でいかに異色のものであるか推察できるであろう。

とは言つても、左千夫は「近江荒都歌」の反歌二首については、「此短歌二首はさすがに人麿の詩想を思はせる歌である。詞も整ひ、内容も充分纏つて居る。作者の情調が能く整つた詞の上に現はれて居る。二首の短歌は決して長歌の比ではない。」と、長歌の場合と違って變つて高い評価を与えている。そしてこれに続く三十六、七番の「吉野宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌」と題する長歌とそれに付属する反歌についても、

幾度繰返しても飽かない歌である。感嘆の至情が自然に漲り溢れて想は秀句に依て活躍し、詞は妙想に依て光彩を増す。流れに任せて下る舟の如く、風に従て飛ぶ雲の如く、聊かの滞りも障も無い無限の味ひを感じるのは、品質と調理と両善相和して融合を極め居るからである。

と最大級の賞賛をしている。

ここで、まず、左千夫が「近江荒都歌」の長歌について

は強い批判を加えながら、その反歌に対しては高く評価してほめている点について考えてみよう。いったい、万葉集における長歌と反歌というのは、合わせて一つの作品と見るべきもので、深くつながっている。そして、長歌で概括的に叙したところのものを、反歌で作者の感懐を表出して詠嘆するというのが一般的であって、問題の長歌も、そうした伝統の制約のもとに作られている。それを左千夫は度外視して、長歌は形式的で感情の流露が見られぬと、攻撃するのは、万葉歌人、特に万葉集の第一期、第二期の宮廷歌人の負わされた制約に理解のない批判と言わざるを得ない面がある。

次に、「近江荒都歌」についてあれだけの強い批判を加えながら、つづく「吉野宮賛歌」になると、別人の批評かと思うほど言葉を尽くして賞賛するのは、批評の規準に安定を欠くうらみが感じられる。斎藤茂吉が「伊藤左千夫と万葉集」(『伊藤左千夫』)の中で

「万葉集新釈」を作るに当たっても、批評のところになると、幾晩も寝ながら考へたと告白されたこともあるほどで、微細な点になると前から結論が出来てゐずに、書いてゐるうちに定まるといふやうなこともあつたに相違ない。そこで、左千夫の万葉集の歌に対する結論も、書いたその時の結論と解釈する方が好いやうである。

と述べているのも、左千夫が作品を評価する際の規準に不

安定なところのあるのを認めての発言と考えられる。

しかし、短詩型の指導者が行なう選や選評というものについて考えてみると、指導者は自己の到達した傾向の範囲内で、良しとする作品を選び、自身の鑑賞眼によって批評を加えるのである。左千夫は門弟たちの作歌指導のために彼等の寄せる作品の一首一首に自分の短歌観にもとづいて入念な添削を施し、丁寧な批評をしたが、それと同じ態度で万葉集の歌に対したのであって、こうした批評も、作家という立場からの万葉集の評釈として見るかぎり許容されよう。左千夫は「万葉集新釈」の中で、しばしば「学者先生達」、「今の多くの詩作家」、「今詩を説く者」といったことばを使っている。彼は世の万葉学者たちのそれとは違って実際の作歌に役立てるようになり、そして新詩社をはじめとする他の結社とは作風を異にする根岸派短歌の育成のため、望ましい万葉受容の規範を示すために「万葉集新釈」を執筆していったのである。

その見地に立って「万葉集新釈」を見るとときに、この仕事は第一巻で中絶はしたけれども、門弟の歌人たちにとつては、すこぶる示唆に富んだ、有効な実践であったということが出来る。それは、万葉集を自分の目で読んだ正岡子規と業績と並ぶところの、左千夫の業績と見られるのである。

なお、補って言うならば、左千夫から直接に指導を受けたところの斎藤茂吉に『柿本人麿』・『万葉秀歌』、島木

赤彦に『万葉集の鑑賞及び其批評』、土屋文明に『万葉集私注』など、それぞれ大きな業績があるのも、左千夫の「万葉集新釈」の流れに立ったところの、実作者の立場からの万葉集に対する接し方であったということができよう。

注1 万葉集の全部の歌について評釈を行なった沢瀉久孝博士の『万葉集注釈』の場合は、昭和二十五年七月十二日から四十一年七月十二日までの十六年の歳月が執筆に費されている。四千五百余首にもよる万葉集の全歌の評釈にはこのように多大の時月を要するのであって、作歌、小説の執筆、雑誌編集、搾乳の仕事などで多忙を極めた左千夫の場合、百首とか三百首とかいうように、取り上げる歌を限定しないかぎり、評釈が中途で終わるのは必至だったと見られる。選釈の形でも、すべての巻の歌、もっと多くの歌人たちの作品について、あのような評釈を残してくれていたらと惜しまれる。その意味では、中絶した最大の原因は左千夫が全体を見通す計画性に恵まれなかったことだとも言える。

注2 土屋文明は『万葉集私注』第一巻の「後記」で、『私注』執筆の動機について

伊藤左千夫先生についてたどたどしく万葉集を読み習った期間も長くはなかつたが、先生の歿後、

時に断続はあつても歌を作ることと万葉集を読むことはとにかく今まで続けて来たことになる。左千夫先生が懸命の志を以て従はれた万葉集新釈は巻第一が完結せぬままに先生の命終となつたのであるが、私は先生からの恩頼にこたへるために、せめて新釈の補注をつくりたい念願であつた。先生は学者ではなく座右に置かれたのも古義と考の程度で其の後の研究の結果は利用することがなかつたから、私の補注はさうしたものを一通りつけ加へて新釈をよみやすくし、学問的進歩に左右されない先生の達識を明かにしたいと考へたのであつた。

と述べている。

(本学助教授)